俺は、この夢を見ると、巻き戻される。

とろろ芋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１ヶ月の最後の日に見る、ある夢を見ると、１ヶ月前に戻るという不思議な夢だ。

主人公、「河石　広夢」は、この夢を３回見た。しかし、３回目で突然どこかで見たことのある女の子が、何故か家にいた。

この女の子は誰なのか、どうして家にいたのか、数々の疑問点があるが、ストーリーを見ていくと、段々分かってくる。

一応、ラブストーリーに進む方針です。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 4

第1話

「・・・また、繰り返される。私のせいで、ごめんね。」
見知らぬ女の子が泣いている。・・・この夢はとても不思議な夢だ。
「・・・またか。」
俺は、大学2年生で「河石　広夢」という。あの夢を見ると、１ヶ月前に戻るという、謎の夢だ。
そんな訳で、本当ならば7月くらいだと思う。
今月で、３回この夢を見た。そして、今は4月1日だ。カレンダーを見なくたってもう分かる。
始業式を3回も一年で受けるか?
「さて、始めますか。３回目の4月1日を。」
気合いを入れて行かなければ、やってられん。
テレビを付けても、同じ番組しかやってない。
ふと、時計を見ると、６時２５分だ。
「久しぶりに、８：００に出れるな。」
２回目、夢を見たとき学校に行かなかった。そしたら夢を見なくなると思ったからだ。
だけど、意味ないようだ。
着替えて朝飯を作るか、と思った時キッチンの方から、「カチャッ」という音がした。
「あれ、誰だ?誰か居るのか?」
１ヶ月前はこんなのなかったのに、と思っているとどこかで聞いたことがある声が聞こえた。
「あっ、だめ!静かにしなくちゃバレちゃう～。」
声からして知り合いではない。じゃあ、誰だ?
壁に隠れて、きいていると、また何かを話した。
「・・・のためには、ここにいるあの人に手伝って貰わないと。」
最初の方が聞こえなかったが、俺が必要なのか?

勇気を出して、聞いてみることにした。
「誰だ？君は。」
「!?」
そこには、どこかで見たことのある女の子がいた。
女の子は、こっちを見たままどうしようかと、迷っていた。
「えっと、あの、その、あっ、ドロボーじゃないですよ。」
かなり怯えていた。しかし、その姿をどこかで見たことがあった。
「怯えなくていい、君を通報したりはしない。だから答えてくれ、君は誰だ？」
女の子は、今にも泣きそうな声で答えた。
「えっと、うぅ～。」
ついには、少し泣いている。何がいやなんだろうか？
「ん～じゃ、名前は？何でここにいるの？」
もう少し簡単な事を聞いていこう。
「▪▪音石　南、です。」
震えた声で答えた。それにしても、聞いたことのある声だと思うがどこで聞いたのか分からないんだ
すると、女の子が急に立った。
「ど、どうした？急に立ち上がって」
女の子の身長は思った以上高かった。俺より、少し低いくらいだった。
女の子は時計を確認すると、こっちを向いて、言う。
「学校は？」
「あ、」
時間とは、すぐに過ぎ去るものである、いつの間にか７：３０分だった。
「えっと、君は学校とかないの？」
気になって聞いてみると、
「うん、あるよ。だって君があるんだから。」
「あと、「君」じゃなくて「南」って呼んで。」
「あっ、はい。じゃ、俺の事も広夢って呼んで。」

「広夢ね、わかったよ。広夢♪」

はぁ～、南について謎はとてつもなく多いが、今は一先ず置いておこう。

第2話

「さて、まずは南に聞きたい事がある。」
「いいよ、何？」
「学校は、どこにあるんだ？」
「そして、何歳だ？」
「学校は、広夢と同じだけど、アンタ女子に年齢聞くのってどうなの？」
「は？いやいやいや、待て！学校が俺と同じ!?どう言うことだ？」
色々急過ぎて分からなくなっている。俺と同じ学校ということは、同い年ってことだな。
は？ワケわからん、頭が痛い。
「どうしったって、こうしたって、同じ学校なんだもの。しょうがないよ。」
「ま、まずうちに女子高生の制服はないぞ！」
「知ってるよ、そんなこと。あったら気持ち悪いし。」
「じゃあ、何着ていくんだよ！」
「まぁまぁ、落ち着けって、ね？」
「落ち着けるかっ！」
朝から疲れた、何なんだコイツ。謎過ぎる。
「まぁ、何とかなるっしょ。」
「なる訳ないだろ！」
「まぁ、広夢の中学生の時の制服とか、あるでしょ？」
「あるけど、男の制服だぞ？」
「大丈夫、貸してくれる？」
「わかったよ。ちょっと待ってて。」
タンスの下にある、白い箱を取り出した。
「確か、この中だったような？」
「！あったぞ、南」
「どれどれ、ふ～ん。まぁ、いいか。」

そう言うと南は目の前で着替え始めた。
「ちょっと！南さん!?俺、男の子だよ！」
「ん？あっ！」
上半身下着姿でやっときずいた。
「こっち、みないで」
また、泣きそうな声で叫んだ。
「す、すいませんでした！」
5分後、扉が開くと、そこにはYシャツ姿の南がいた。
「ど、どう？」
「どうって聞かれても、あと寒くないの？」
「結構、寒い。」
「だろ、じゃあ、これ着てろ。」
俺が、高1の頃着てた薄茶のコートを南に着せた。
「暖かい。ありがと広夢。」
南が温かい笑顔をくれた。さて、面倒なのはこの後だ。そう、「始業式」だ。
高校生活2年目の初めに、新しい転校生が来たとしたら、クラス中えらいことになる。
ましては、南と一緒に学校に行く所を友達に見られたら、精神的にアウト＋帰りも見られたらってあれ、南ってどこに　住んでいるの？
「なぁ、南。お前、どこに住んでいるの？」
「どこって、ここだよ。」
「ここだよ。」という言葉が頭の中で反響している。
「な、何を言っているんだ？」
ビックリ衝動が強すぎて、理解出来ず、声が震えている。
「ここは、俺の家だからな！俺、男だからな！あと、自分の家くらいあるだろ、普通。」
何とか、精神を落ち着かせて聞いてみた。
「ううん、無いよ。私の家は。」
「で、でも実家とかは？」
「無いって、身内もいない。帰る場所が無いんだ。」

少し、暗い表情で話している南。そして、話が急過ぎて頭が混乱している、俺。
「だから、ここに住ませてくれない？お願い、広夢。」
困った表情で南はこっちにお願いをする。
・
「・はぁ～、全く困った奴をほっとけないのも罪か？まぁ、いいよ。」
「ほんと？」
「ああ、本当だ。」
南が、嬉しそうにしているから、少しおちょっくってやろう。
「だが、俺は男だ。いつ南を襲うか分からないぞ？」
「ふ～ん、別にいいよ。その勇気があるならね。」
「なっ、南！一応、女なんだからそう言う事を堂々と言うな！」
少し、恥ずかしいんだこのセリフ。予想外の反応に少し、ドキッとしてしまった。
はぁ、厄介なのがやってきたな。